

聖書:ヨシュア記4章4章1～9節

説教:永久の記念とするために

はじめに

今日午後から2019年度の信徒総会が開かれます。昨年一年間の恵みに感謝しながら、これからの一年の歩みについても確認していく予定です。昨年は、藤野聖山園に墓地を取得することができました。既に楽しみにしておられる方もおられると思いますが、今年度は、そこに墓石を立ていくことを目標としたいと考えております。

その墓石のことについてですが、創世記の中でヤコブが妻のラケルを葬ったときに墓の上に石の柱を立てたという所を除けば、ほとんど聖書には出て来ません。聖書に書かれていないのに、なぜ私たちは墓石を立てようとするのか。そのような習慣になっているから立てるのではありません。きちんと聖書的な理由を確認しておきたい。それで、そこで今日の箇所を取り上げることにしました。ヨシュアが神から命じられた十二の石は、読んでおわりのとおりに墓の石ではありません。永久の記念とするために石を据えるのだと言われました。それはどのような意味であったのか。私たちにとってどのような恵みとなっていくのか。ともに見てまいります。

1 約束の地に入るとき

1) モーセからヨシュアへ

今日の箇所を見ていく前に、ここまでの流れを確認します。エジプトで苦しんでいたイスラエルの民を救うために神はモーセを遣わし、モーセに率いられた民たちはエジプトから脱出を果たします。ところが、すぐに故郷に戻れたのではない。四十年間、荒野をさまよった末にやっとヨルダン川の東側にたどり着く。モーセは約束の地を前にして生涯を閉じることになり、ヨシュアが次のリーダーとなります。

2) 二つの問題

さていよいよ約束の地に入っていくとしたとき、イスラエルの民たちの前に二つの問題が立ちまわります。一つはヨルダン川です。このとき普

段より水かさが増して大きな流れになっています。体力のある人だけが泳いで渡れということか。でも約束の地はそんなところではない。いろいろなハンディを負っている人たちも入る場所として神が定めてくださったところのはずです。では、どのようにして全員が無事にこの川を渡れるか。これが一つ目の問題でした。

二つ目の問題。仮に川を渡りきることができたとします。でも、約束の地に入るためには、エリコという町を通らなければなりません。エリコの住民にとって、イスラエルの民は自分たちとは違う神を信じるよそ者、自分たちの敵です。堅く門を閉じて、町に入れようとしなさい。どのようにしてエリコを通ってくるか。これが二つ目の問題でした。

2 主の助け

1) エリコ偵察

そこでヨシュアはまず、エリコの町に二人の部下を派遣して偵察させることにします。そのままでは入れないので身分を隠し、変装して人混みに紛れて町の中に入り、ラハブという女性が経営していた宿に泊まることにします。ラハブすぐに見知らぬ二人の男が何者であるかを見抜きます。でも警察には通報しない。かえって、警察が追ってきたときに二人をかくまって無事に逃がします。そのときラハブは、「あなたがたの神、主は、上は天において、下は地において、神であられるからです」と告白し、自分と家族を救い出して欲しいと願うのです。ヨシュアは、このことを戻って来た二人の部下から聞き驚きます。神はすでにヨルダン川を渡り、エリコの町のなかで信じる者を起こしておられる。そうであれば、もう自分たちは迷うことはない。前に進むときであると決断します。

2) 川を渡る

でもどうやって川を渡るのでしょうか。ヨシュアにすばらしいアイデアがあったわけではない。わからないけれど、とにかくレビ人や祭司たちが契約の箱を担いで先頭に立ち、民たちは契約の箱から距離をおいて後に従うようにと命令を出しました。

契約の箱がどんどん川に近づきます。そうってから初めて主が語ってくださる。「あなたは契約の箱を担ぐ祭司たちに『ヨルダン川の水際に来たら、ヨルダン川の中に立ち続けよ』と命じよ。」(ヨシュア記3章8節)

こうして神が語ってくださったのはよかったのですが、問題がすべてクリアになったわけではない。どうやったら川の真ん中に立ち続けられるのか。具体的な説明がないのです。川の水が流れている限り、契約の箱をかついだ人が川の真ん中に立っている事などできません。立ち続けるためには、川の水がせき止められる以外に考えられません。でも本当にそんなことが起こるのか。確かに自分たちの先祖がエジプトを脱出した時、葦の海を前にして逃げ場がなくなったとき、海が二つに割れて人々はその真ん中の乾いたところを渡ったと聞いたことがある。でも、そのような奇蹟が再び自分たちにも起こるのだろうか。主を信じて進むしかありません。

この結末はどうなったのでしょうか。3章15, 16節にあります。「箱を担ぐ者たちがヨルダン川まで来たとき、ヨルダン川は刈り入れの期間中で、この川岸にも水があふれていた。ところが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際の水に浸ると、川上から流れ下る水が立ち止まった。一つの堰が、はるかかなた、ツアレタンのそばにある町アダムで立ち上がり、アラバの海、すなわち塩の海へ流れ下る水は完全にせき止められて、民はエリコに面したところを渡った。」

高速道路にはETCというものがあって、車がかなり近くまで行かないとゲートは開きません。初めてETCを通ったときはドキドキして歓声を上げたことを覚えています。なにかそれに似ています。

3 記念とする

1) 信仰によって救われる

ここに書かれていることを通して、救いについていろいろ教えられます。全員が渡りきるということは、どんな人であれすべての人間が神の国である約束の地に招かれていることを意味します。ではその約束の地にはどのようにして入って行くのか。まるでエスカレーターに乗るようにして一歩足を踏み入れれば、あとは自動的に目的地に着くようなも

のと違います。約束の地の前にはエスカレーターなどありません。その代わりに、とても渡ることのできないヨルダン川が流れています。それなのに神は、そこを渡りなさいと言われる。あなたが信仰をもって足を踏み入れさえすれば、神が川をせき止めてくれて、あなたは乾いたところを通って安全に渡れる。あなたはそれを信じて足を踏み入れなさいと言われるのです。

私たちはあるとき、この方に出会い、「あなたはわたしを信じますか」と問いかけられました。ある方は、目の前を流れるヨルダン川の川の水がどれほど深いのか、あまりわからずに「はい、信じます」と答えたかもしれません。それは幸いなことです。またある方は、ヨルダン川の水の深さにめまいを覚えて、とても渡れないと一度は迷ったかも知れません。でも、もう他に逃れる道はない。右にも左にも、まして後ろにも戻ることができない。前に進むしか道はない。それで思い切って「はい、信じます」と答えた方もおられる。それも幸いなことです。どんな状況であれ、私たちはヨルダン川を渡る決心をし、その決心に神は応えてくださって、ひとり一人にふさわしくヨルダン川を渡らせてくださったのです。

2) 神はどこにおられたのか

そのとき、主はどこにおられたのでしょうか。川を渡るとき、私たちは一生懸命でした。滑って転ばないように、つまづかないように、せき止められている水がいまにも押し寄せてこないか、気にしながら急いで渡らなければと夢中で足もとしか見ていない。でも、川を渡りきってから後ろを振り返れば何が見えたか。川の真ん中に、祭司の肩にかつがれた契約の箱が見えます。契約の箱は神の御臨在の象徴です。ということは、私たちが約束の地に向かって夢中で川を渡っていたとき、神は何をしてくださっていたのか。主ご自身が川の真ん中に立って、水をせき止めてくださっていたのです。

これはまさに十字架のみわざです。神と罪ある人との間には、絶対に渡ることのできない深い川が流れていて、神の所に行くことができない。もし強引に行こうとするなら、神の御怒りを受けて死ぬしかない。ところが神のひとり子である主イエス・キリストが、身代わりとなって十字架におか

かりになり、私たちにさばきが及ばないようにとせき止めてくださった。それで救われたのです。でも、救われたのでそれで終わりではない。もう一つすべきことがありました。それはなにか。

3) 記念とする

主が十二の石を据えるように命じたとき、その理由についてこう語っておられます。6, 7節。

「それがあなたがたの中で、しるしとなるようにするためだ。後になって、あなたがたの子どもたちが『この石はどういうものなのですか』と尋ねたとき、ヨルダン川の水が主の契約の箱の前でせき止められたのだ。箱がヨルダン川を渡るとき、ヨルダン川の水はせき止められた。この石はイスラエルの子らにとって永久に記念となるのだ。」

ヨルダン川を無事に渡り救いの経験をした人たちが立てた石を見て、やがて子どもたちが神の救いを知るようになっていく。ヨシュアが立てた十二の石は主が十字架で私たちのために苦しみながら御怒りを受けてくださったことを忘れないように、後の子孫たちがそのことを覚えていくように、そのために石を立てていく。

では、その石はどこから持ってきたのでしょうか。3節にあります。「その者たちに命じよ。『ヨルダン川の真ん中、祭司たちが足をしっかりととどめたその場所から十二の石を取り、それらを携えて渡り、あなたがたが今夜泊まる宿営地に据えよ。』」

ヨルダン川の真ん中、祭司たちが足をしっかりととどめた場所にあった石。すなわち川の水をせき止めるために主が立ってくださったところにあった石。十字架が立てられた場所にあった石です。

救われたときの喜びは何年経とうとも忘れるものではありません。あのとき、まるで天にも上る心地がしたかもしれません。そのときは自分ひとりの喜びしか考えられなかった。でも実は違った。もっともっと大きいものであった。私たちが経験した救いの恵みは、一人では終わらない。この石を見た子どもたち孫たちに、私たちの世代が味わった十字架の恵みが伝えられていきます。そのようにして、子孫に語り継がれていく。ですから、私たちが立てようとしている石は単なる飾りでは

ありません。世間の習慣に従って立てるものでもない。十字架の救いを証ししていく石です。私たちの子どもたちが救いに導かれるために主が立てなさいと命じたその石を、私たちは信仰をもって立てていきたいと願います。